

柔らかなココロ 「ワーキングマザーの胸の内」

体温計のピピピ、、と乾いた音が真夜中のシンとした部屋の中に響き、「やっぱり、、、」とため息交じりの言葉がこぼれ落ちた。

深夜就寝中、娘の異常な体の熱さを感じとった私は眠たい目をこすりながら体温計をおもむろに娘の脇に差し込み、うとうとしながらその時を待っていた。そして表示された 39 度超の数字。

真夜中の発熱なんて 3 人目にもなると慣れっこだが、この日は違った。実は翌々日から全日本学生柔道体重別選手権大会で秋田に娘と一緒に出発する予定だったのだ。翌日には下熱する事を祈りながらぐずる娘に何とか解熱剤を飲ませ、翌朝を迎えた。見事、平熱まで下がって元気になった娘をみてほっと胸をなでおろしたのも束の間、やはり夕方、熱がじわじわと上がってきた。

頭の中では明日からの秋田行に同行させるか否かの判断の瀬戸際、様々な葛藤を巡らしていた。今回は山口から秋田までの新幹線 8 時間の移動。はたしてこの状態で一緒に移動していいのか、、、大会期間中は託児所をお願いできるとはいえ、熱がまた上がったなら託児所に預けることすら出来ない。

監督として、審判として参加する予定のこの大会。誰にとって、何がベストなのか考えた結果、主人と主人の実家に無理を承知でお願いし、娘を含めた子ども 3 人を預かってもらえる事になったのだが、もう心の中はモヤモヤ。行きの新幹線の中では、言葉にはいい表せない忘れ物をした気持ちが山のようにあり、後ろ髪を引かれるどころか、後ろ髪が抜かれるような痛みさえ感じる始末。

しかし、長らく気持ちの切り替えが出来ない私を救ったのは、娘の代わりに急遽持参したノートパソコンだった。自宅でパソコンを開こうものなら容赦なくキーボードを押しまくられ、挙句の果てには画面を閉じさせられる為、なかなか出来なかったパソコン仕事。それをこの移動中、一気に片付けることに成功したのである。

そして、秋田に到着し稲庭うどんをすすする時にはすっかり気持ちは仕事モードに。翌日には徳山に残してきた娘もすっかり熱が下がって元気だという報告も受け、試合も無事に終了し事なきを得た。



それにしても 4 泊 5 日の秋田出張で久しぶりに手足を伸ばして眠れたベッド。「最高!!!」と思いつつもながらも強烈な寂しさも実感したことも確か。寝返り一つ打つのも気にしたり、急な発熱で起こされたりと大変な毎日が明日から待っていると分かっているながら、あの狭いベッドで子ども達と寝ころがることを想像するだけで、かすかに胸が高鳴る。

そして、秋田から続いた長い列車の移動も徳山までいよいよ 1 時間をきった。会いたい気持ちが頂点に達し、子ども達の顔をにんまりしながら思い浮かべる。これもまた、ワーキングマザーの至福のひとつき時なのである。

(近藤優子)